

心理学シリーズ 「人間嫌い」編 <その2>

～遅れて来た人～

2006.07.15 タツノオトシゴ



「人間嫌い」といえば(仏)文学のモリエール、

出演 T：タツノオトシゴ U：大学の同窓生（元構造事務所所長）

店員1、店員2：行きつけの居酒屋の従業員

T：「やあ〜っ！久しぶり、元気かい（^^；）
 U：「ゴメン、ゴメン、この前は、約束の時間に間に合わなくて・・・」
 T：「此方こそ、急に呼び出したりして、十数年ぶりだよね」
 U：「いや〜っ、嬉しかったよ！覚えてくれてて・・・娑婆にも久しぶりだし」
 「ところで、用事って何だったっけ？ 今更借金はイヤだぜ（^^；）
 T：「うん、U君がいなくなってから、色んなことがあってね・・・」
 「急に話がしてみたくなかったのさ」
 「奥さんに聞いたんだけど、メッセージは『場所と時間』以外は届かないのかい？」
 U：「昔からの決まりで、受信のみ、しかも一方通行だそうさ」
 「僕がいた頃からすると、世の中、随分変わっているのだろうね？」
 T：「うん、えらい変わりようだと思うよ！」
 「場所もなんだから、近くの店で軽く一杯やりながら話そうか？」
 U：「それは有難い！何時も匂いだけで、欲求不満がたまっているんだ！」
 T：「歩きながらだけど、あちらへ行ってからどうしてるんだい？」
 U：「・・・」
 T：「失礼、そうか、それは聞けなかったんだ！」
 U：「いや、いいんだ。気にしないでくれたまえ。これでも結構不自由な生活さ！」
 T：「あ〜っ！此処覚えているかい？昔よく来た場所だ。懐かしいな〜あ！」
 「じゃあ、今日は此処にするか・・・」
 店員1：「らっしゃ〜い！」「お二人さん、ご案内〜い！」

T：「奥の静かな席がいいね！」
 「誰か知ってる人に会うのも気まずいし、
 ゆっくり話したいから・・・」
 U：「うん、そうしよう！オーダーは任せるから
 ・・それと、持ち合わせは無いので・・・」
 T：「当然だが、色々不便な決まりが
 有るんだろうね！」



T : 「3 Kの掟、『買ってはいけない』、『書いてはいけない』、『痕跡を残すな!』だろう」

U : 「そういう訳だ。こちらからも聞きたい事があるのだが、まあ後にして注文が先だ!!」

T : 「すみませ〜ん! 生中二つ、それからイカの刺身、イサキの焼いたの・・・」

店員2 : 「喜んで!」 「生中二つ、イカ刺し、イサキ塩焼き〜い!」

T : 「今回は家には帰らないのかい?

折角出て来れたのに・・・」

U : 「帰ると3 Kの掟が守れないから、
仕方ないさ」

「で、話の本題に戻るが、今回は何の
用事だっけ?」

T : 「実は、同人雑誌の宿題が残っていて、
10年前に死んだ人に会って話をする
という変な企画があつてね・・・」



U : 「ふ〜ん! おかしな企画があるんだ。それでこの前呼び出しが掛かった訳か」

T : 「まあ、そんな訳だ。連絡不十分で申し訳なかったけど、今回は無事に会えた (^^)」
「この前は、大変だったろう? 浦島太郎状態で・・・」

U : 「そうだね、大分ウロウロしてやっと場所が分かったのだが、遅れてしまった」

店員2 : 「へーい、おま〜ちい! 生中!」

T : 「じゃあ、再会を祝して『乾杯!』、いつまでも若いU君へ!」

U : 「しかし、君も大分苦労してるみたいだね。もうそろそろ定年では?」

T : 「いや、とっくに仕事とおさらばしてる。ほんとにもう、やってられないよ!」

U : 「この前の話を先にさせてもらおうと、最後に会った場所を基点に辿ったのさ」
「何処か覚えているかい?」

T : 「最後ね〜え! 神戸の震災の件かな?」

U : 「そういえば、神戸で大地震があったらしいネ、この前初めて知っただけけれど・・・」
「それよりチョッと前の、H先生の歓迎会が出発点さ」

「あそこで分かれてから、君は会社へ戻って資料を取りに行ったはずだ」

T : 「そうか、最後に分かれた所が指定場所だったんだ。ゴメン、ゴメン!」
「それで、会社で会うとのメッセージか・・・」

U : 「余裕を持って君の会社に行ったのだが、看板が出てなかった・・・」

「公衆電話で電話帳を調べようとしたのだが、何処にも見当たらない」

「近くに関連会社のホテルがある事を思い出し、フロントで引越し先を聞いたんだ」

「中津の、Pタワービルに移ったのが分かり、9階の受付で聞いてみたんだよ!」

T : 「それは大変だったネ! それで、誰か覚えてくれていたかな〜あ?」

U:「丁度、事務の女性が覚えてくれていて、『Tさんは近くのSビルの会社へ行った』と教えてくれたんだよ。窓から、『あすこに見えるでしょう!』って・・・」

T:「そうか、彼女には色々お世話になったけど、そこまでしか知らせてなかった」
「前の会社も随分変わったんだろうな? 大阪支店の設計も解体したし・・・」

U:「そこで、歩いてSビルへ行ったのさ! 看板を確認し8階の受付で聞いてみた・・・」
「ところが、誰も知らないって云うんだよ、君の事・・・」

T:「そんなものさ、企業って・・・!」「僕の事を知ってる人間はほとんど残っていないさ!」
「優秀な人間は、早々と見切りをつけ、残った人間で傷つけあう、いやな世さ!」
「義理も人情もあつたもんじゃない。結果が全て!!信頼できる人間なんか居やしない!」

U:「おいおい、冷静な君が珍しく興奮してるじゃないか?」

店員2:「へーい、おま〜ちい! イカ刺し一丁!、イサキ塩焼き一丁!」

T:「世の中、すっかり変わっちゃった!

口先がうまく人より先に美味しいとこだけ戴きという営業が出世する。地道な営業マンはあがったりだ」「仕組みも分からず仕事を取ってくるから、真面目な技術者は大迷惑だ!」
「残業に次ぐ残業、解決困難な課題、だんだん追い詰められていく技術者・・・」
「それが、例の構造偽装事件にまで繋がっているんだよ!」



U:「その偽装事件って、初めて聞くけど・・・」

T:「構造のプログラムを無視して、勝手に改ざんデータを捏造してるんだよ!」

「技術屋の風上にも置けないが、自分で自分の首を絞めているようなものさ」

「それと、自殺者が増えた! 誰にも相談できず、死をえらぶ中高年の男性達・・・」

U:「そういえば、街を歩いていると元気の無いおじさん達が一杯だね〜え」

「大阪でも地震の被害者が多く、未だにテント暮らしの人が残ってるようだけど?」

T:「いやいや、あれはホームレスさ。破産したり、ヤクザの追いたてから逃げたり・・・」

「でも、最近ホームレスの方が気楽だと、ますます増える傾向だ」

「学校を卒業しても、定職に就けない若者も増えている。ニートって云うんだそうだ!」

「君のところはどうだい?ちゃんと就職できそうかい?」

U:「おかげさまで、何とかなってるようだ。僕がいなくてうまいってのもかも・・・」

T:「それで、さっきの続きだけれど・・・何処まで聞いたんだっけ?」

U:「うん、SビルのL社を訪ねた所まで話した・・・」

「ここでも、社員ではなさそうだが、品の良い女性が出てきて、『Tさんは4年前に会社を辞められ、今はS市の老人ホームにいるはずです』と教えてくれた」

「それを聞いて正直ビックリした！まさかそんな年でもあるまいに、なぜ老人ホーム？」

T:「そうか、僕が建設会社を辞めてから、福祉の仕事をしてる事は知らなかったから・・・」

「S市は今年政令指定都市になったのだが、そこで社会福祉法人を立ち上げた」

「のどが渇くな～あ！ お代わりの中ジョッキ二つ！」

店員2:「喜んで、生中 二杯、3番さ～ん！」

U:「それは大変だったろう！そして出来上がった施設、何故辞めたんだい？」

T:「最初からの契約条件さ！」「法人が出来上がれば僕の仕事は、おしまい・・・」

「あとは、金儲け主義の連中の出番。役所への手前半年だけ施設長をやったけど」

「リスクを少なくし、危ない橋を渡ったら、ハイさようなら・・・の世界さ」



U:「でも、施設長を勝手に辞めさせるわけにはいかないだろう？」

T:「そこが違うのさ、『契約社員』という、うまいやり方があるのさ」
「解雇ではなく、契約終了という逃げ道が・・・」

「まあ、それを知ってて応じたのだから、文句は言えないけどね」

U:「ふ～ん！世の中随分変わったものだね～え！」

「ついでに聞くが、その後の仕事はどうしてる？」

T:「な～んにも・・・、人間を信じられなくて仕事をする気がしない！」
「NPOの仲間や、大学院の同窓生と・・・」

U:「またまた、分からなくなってきた」「大学院って、何処の????」

T:「大阪市のさ」「学費が安くて、市民だと入学金も割引さ」

「一応、今年の春修了したけど、今も3回生みたいなもんだよ」

U:「それを聞いて、少し安心した。」

「最後に尋ねた施設では、君の事を誰も話してくれなかったんだ」

「一人だけ、相談員の女性がこっそり教えてくれたけど・・・」

「君は、相変わらず女性の受けが良いから、羨ましいよ！」

T:「随分と回り道させてしまったネ！ 前の家まで行っても閉まっていたらどう？」

U:「そう、てっきり何か有ったんではないかと心配したよ」

「おや、もう制限時間が迫っている。今日の所はこんな事で良かったのかい？」

T:「そうさな！ 期日遅れの原稿だから、お小言は貰うだろうけど・・・」

「次は、また十年ルールって訳だね」

U：「いつでも会えるという訳ではないが、十年に一度はOKさ！」

「それじゃ悪いけど先に失礼するよ、お元気で・・・」

T：「うん、君こそ達者で・・・」

「それと、H先生は元気にやってるかい？」

U：「相変わらずだ、同じ構造屋だから話は合うよ」

「それじゃ・・・」

店員2：「あれ？連れのお客様は？」

T：「用事があるので、先に帰ったけれど？」

店員2：「そうじゃなくて、何時いらっしゃるのかと??」

T：「さっきまで、そこで飲んで・・・??？」

「あれ～え？ジョッキが二つ、手付かずに生ぬるくなってる！」



店員1：「先ほど一緒に来られたお客さまは、別のテーブルに行かれましたが・・・」

「ほら、あの奥の隅にいらっしゃる若い女性・・・」

T：「そうか、痕跡を残さずってやつか！」

店員1：「????？」

T：「じゃあ、悪いけどこれも含めてオアイソ！」



今回は、劇風に「前回の宿題」を書いてみました。

「人間嫌い」の作者モリエールは本名ジャン・パティスト・ポ克蘭といい、パリのサン・トレノ街で生まれました。

古典や哲学の造詣も深く、弁護士資格を獲得したのですが、女優と恋に落ち、劇団を結成しています。劇作家であり俳優でもあった彼は、芸術家としての道を歩む事が宿命であったのでしょうか。

福祉世界では、一般企業などの参入により成果主義が蔓延り始めています。対人援助には、このような「ナラティブな記録」から心理面を分析する手法があります。劇作家には、常に人の心理を読み取る力が求められています。

登場人物のU氏は大学の後輩で、若い時に独立し構造事務所を開きました。精力的に活動し、これからという時に病に倒れました。入院先の病院にお見舞いに行き彼が一時帰宅していた為すれ違いで会えず、あとから電話で話をしたのが最後になりました。その時のイメージが、今回の作品のヒントになっています。